疾風のごとく駆け抜けたRIAの住宅づくり

［1953——69］

RIA住宅の会 編

彰国社

疾風のごとく駆け抜けたRIAの住宅づくり

［1953 ― 69］

RIA住宅の会 編

彰国社

疾風のごとく駆け抜けたRIAの住宅づくり【一九五三–六九】

目次

はじめに——今、住宅を設計しているキミへ　**磯達雄**　18

第一章　一九五三–六九　RIA住宅の時代　25

再録　住宅とRIA　**近藤正一**

再録　建築家は住宅設計で生きられるのか　**植田一豊**

再録　組織　**三輪正弘**

第二章　チームによる設計という挑戦　49

プランニングコンペ　**近藤正一**

平面、架構、壁　**近藤正一**

Ⅰ　平面　事例解説——グリッドプラン／ゾーンプラン／スクエア／コート

Ⅱ　架構　事例解説——垂木構造／小母屋構造／シャーレンとファルトヴェルク／S造

Ⅲ　壁　事例解説——真壁／大壁

第三章　大量需要にこたえるために　125

RIAホームカウンセラーズ　**近藤正一**

［補足解説］RIAホームカウンセラーズ

コンピューター利用のシステム　**近藤正一**

［補足解説］コンピューター利用のシステム——住友信託RIAシステム、DACシステム

対談　DACシステムについて　**今井清輔×川崎浩**

再録　再び住宅に挑む建築家の進路　**近藤正一**

論考　集団設計の今日的な意味——RIAによる大量設計システムの批評性　**藤村龍至**

第四章　RIA住宅平面図集　177

あとがき　**近藤正一**　214

RIA略年表　218

編者略歴　222

写真クレジット・出典　223

再録　予測——建築家の行動限界　**近藤正一**

［補足解説］産業化住宅——錦戸邸、所邸

論考　真摯な姿勢からの出発——RIAによる一九五〇–六〇年代の住宅づくりの様相　**内田青蔵**

第一章　一九五三―六九　RIA住宅の時代

高梨邸

RIA 住宅のキーワード集 ①–⑫

スリッパ 34
タブーは中廊下 34
マイサイクル 42
RIA の家具 48
ラワンベニヤ真鍮釘打ち 58
オイルステイン仕上げ 58
引違いガラス戸 59
小壁をなくす 59
RIA の建売住宅 69
玄関とお勝手 91
八・六・三から 2DK に 113
無残であったコアシステム 113
アスファルトブロック 124
羽目板 124
サイトプラン 129
流し台 159
＋ ONE のへや 166
ユーティリティルーム 166
インターホン 176

ＲＩＡでは、今日でも、どこかの地域で、年間何軒かの個人住宅を設計している。しかし、本書で言われるＲＩＡ住宅とは、タイトルでも明示しているように、設立した一九五三年から一九六九年までの間、まさに集団として凝縮した共同体の中で、すなわち、当時ＲＩＡグループと称された集団によっての、住宅設計のデザイン活動の時期に生み出された住宅を限定して指していることを、改めて申し上げておく。

この一七年間は、ちょうど日本が、戦後の敗戦から脱却して立ち直り始めた時期であり、世の中の様相も目まぐるしく変わった。住宅についても、一九五五年、日本住宅公団（現在の都市再生機構）の設立などが、その象徴である。

当時の状況を理解してもらうために、まずは三本の再録記事を読んでいただこう。

近藤正一の「住宅とＲＩＡ」はＲＩＡ住宅の変遷を五つの時代に区分して解説したものである。続く、植田一豊の「建築家は住宅設計で生きられるのか」は、建築家にとっての住宅設計というテーマについて論じている。三つ目の三輪正弘の「組織」は、ＲＩＡが設計する主体として選んだ組織という形と、その設計方法についての概説だ。いずれもこの時代の建築家の意気込みと悩み、そして覚悟のようなものが伝わってくる味わい深い文章である。（磯）

住宅とＲＩＡ

近藤正一

一、げいじゅつのじだい

芸術の時代は、ローコストハウス★1から始まる。一九五二年、新制作展★2に、この実物が金二十四万円也の商札をぶら下げて登場したとき、多くの建築家たちは「あまりに極端なローコストは、住宅の質をますます低下させるものだ。」と反対を表明した。この批評は社会に向かっては的を射ているけれども、ＲＩＡに対しては当てはまったとは思えない。当時の世相から、どうしても社会主義的な色彩のもとで芸術作品をプレゼンテーションしなければならなかったのは、ＲＩＡの主宰者山口文象の場合だけとは限らない。ちょうど、同齢の前川國男★3が、コストの差こそあれ、プレモス住宅という量産化の庶民住宅を発表したのもその当時である。したがってこのローコストハウスの流れをくむ、大久保邸★4、小町邸★5のような、決してローコストでない住宅で、同じ手法による、すぐれた芸術作品を発表することも可能であったわけだ。ローコストハウス、大久保邸、小町邸、それに牧邸を加えたこの当時の住宅は、いずれもアメリカのモダンプランの影響を受け、その表現は真壁構造★6、構造材露出の手法を徹底している。まさに一作一作が写真になる芸術であった。

『建築』一九六二年六月号掲載文章を再録。

近藤正一――222頁参照

★1　ローコストハウス――70頁参照

★2　新制作展――美術団体の新制作協会が主催する公募展。

★3　前川國男――建築家（一九〇五－一九八六）。作品に東京文化会館など。

★4　大久保邸――102頁参照

★5　小町邸――94頁参照

★6　真壁――100頁参照

この頃は、建築界全体が貧乏の時代であったので、建築家の目は専ら、小住宅にそそがれていた。清家清[7]、池辺陽[8]をはじめ、若い世代の増沢洵[9]、安田与佐[10]、永松亘[11]、臼倉健之[12]のすぐれた芸術作品は、当時の小住宅設計の華やかさを物語っている。学生が応募する懸賞の住宅も、新しさに満ち満ちた作品であった。そのいずれもが、アメリカのモダンプランの影響を受けながら、その手法を日本的なものとしてとらえていた。今やスティールハウスしかやらない広瀬鎌二[13]ですら、西京風の家などの手の細かな木造の住宅を発表しているほどだ。つまりこの時代の作家たちは、まったく同じ環境で、まったく同じ考えのもとで出発し始めたのである。こういった意味で、RIAも、当時のういういしい住宅作家の第一線に並んでスタートを切った。

時代の移り変わりとともに、それぞれの建築家は、変貌を始める。RIAは、もっとも純度の高い、もっともモダンプランの牧邸を最後に、きたない時代に移ることになった。

二、きたない時代

牧邸[14]は、単純で、合理的な生活と、モダンスタイルを望んでいた、進歩的な、独身の声楽家のために作られた。当時、芸術的なRIAとしてはこの人こそ、最高の建主であった。コアシステム[15]、オープンプランのこの住宅が建ってまもなく一大椿事が持ち上がった。これから一生独身であるはずだった彼が結婚し、そうするそばから子供が生まれた。彼の極めて割り切った生活観が一瞬のうちに消え去ったことはいうまでもない。この純度の高い住まいの増改築を、今さら芸術家に頼むわけにもいかない彼は、自らの手で、住みよいようにつぎたし、改造し、この家の原形は設計者ですら分からぬものに変わってしまった。これは勿論、建主側の大きな誤算ではあるけれども、この一件は、RIAにもかなり荷の重い問題を感じさせた。住宅設計を芸術派と生活派に分けるとすれば、これ以後生活派に属する仕事が多くなるのは、この一件だけを理由にすることはできないが、その象徴としては充分な椿事であった。

この頃になると、婦人画報の『モダンリビング』を筆頭に、いろいろな雑誌に住宅が記事として取り扱われるようになり、これを見た人々が、フリーに事務所に設計依頼に訪れるようになった。これらの人々は概して、若い、お金の少ない、モダンを夢見てはいるが、実際は、がっちりした生活派のサラリーマンであった。乾式工法、リビングキッチン、造り付け家具、それに前から踏襲された真壁構造によったこれらの小住宅は、いずれも安く、狭くつくられていたため、そのプランの新しさとは対照的にきたない光景を呈している。すなわち構造を裸にすればするほど、オープンプランにすればするほどその材料のみすぼらしさと、生活の逃げのなさのために、かえって、そのきたなさは増したのである。これらの小住宅を相ついで設計したのも、もちろん仕事のルートが少なく、たとえわずかな設計料でも、それで食べていくことが必要であったのだが、このきたない時代であっても、わずかながらの自己表現の活路を見出そうとした作家のいじらしさに、その後のRIAの性格を決める大きな要因を見

★7　清家清――建築家（一九一八－二〇〇五）。作品に森博士之家など。

★8　池辺陽――建築家（一九二〇－一九七九）。作品に立体最小限住宅など。

★9　増沢洵――建築家（一九二五－一九九〇）。作品に最小限住居など。

★10　安田与佐――建築家。作品に一八坪の家など。

★11　永松亘――建築家。作品に市原さんの住まいなど。

★12　臼倉健之――建築家。作品に画家S氏のアトリエなど。

★13　広瀬鎌二――建築家（一九二二－二〇一二）。作品に上小沢邸など。

★14　牧邸――183頁参照

★15　コアシステム――113頁参照

118 PLANS OF RIA HOUSING

INDEX

1952
001 ローコストハウス
002 高橋邸
003 大久保邸
53
004 小池邸
005 中村邸
006 岡邸
007 岩原邸
008 千葉邸
009 S 邸
010 土田邸
011 渡辺邸計画案
54
012 青山邸
013 福田邸
014 佐川邸
015 牧邸
016 沖野邸
017 吉田邸
018 小町邸
019 下田邸
020 平形邸
021 田村邸
022 辻村邸
023 大和住宅
024 木畠邸
025 西山邸
026 広瀬邸計画案
027 船曳邸計画案
028 佐藤邸計画案
029 山本邸計画案
55
030 渡辺邸
031 長瀬邸
032 沖中別荘
033 石川邸
034 山口邸
035 山本邸
036 阿部邸
037 高林邸
038 下中別荘
039 松村邸
56
040 桜井邸
041 木林邸
042 K 邸
043 稲本邸
044 木島邸
045 二俣邸
046 雫石邸
047 田中邸
048 大槻邸
049 中村邸
050 浜本邸
051 植野邸
052 I 邸
053 K 邸
054 笹川邸
055 RH-1
056 RH-2
057 近鉄建売住宅
058 日比野邸
57
059 杉山邸
060 早水邸
061 フリッターマン邸
062 大串邸
063 高田邸
064 岩井邸
065 S 邸
58
066 橋本邸
067 大河内別荘
068 茂沢邸
069 新建築競技設計応募案
070 三国邸
59
071 野口邸
072 北村邸
073 加村邸
074 千坂邸
075 内田邸
076 S 邸
077 高木邸
1960
078 高尾邸
079 横尾邸
080 近鉄建売住宅 R-5
081 λハウス
082 白雲観光建売住宅
083 清水別荘
084 錦戸邸
61
085 山名邸
086 川合別荘
087 高橋別荘
088 横溝別荘
089 鈴木別荘
090 北村別荘
091 山荘 -7
092 山荘 -8
093 江幡邸
094 今井邸
095 小野邸
096 高梨邸
62
097 対木邸
098 山県邸
099 市川邸
100 船木邸
101 石嶋邸
102 山田邸
63
103 O 別荘
104 真山邸
105 神原邸
64
106 ピーターソン邸
107 兼坂邸
108 石原邸
109 N 邸計画案
65
110 中野邸
66
111 植村邸
112 相沢邸
67
113 所邸
114 稲川邸
115 猪飼邸
116 岩田邸
117 高野邸
68
118 石嶋別荘

アイコンの説明

平面
- G グリッドプラン
- Z ゾーンプラン
- S スクエア
- C コート

架構
- 垂 垂木構造
- 小 小母屋構造
- シャ シャーレン
- ファ ファルトヴェルク
- 鉄 S 造
- コ RC造／ブロック造

壁
- 大 大壁
- 真 真壁
- 外/内 外:大壁／内:真壁

室名

- L リビング
- D ダイニング
- K キッチン
- B 寝室
- G 応接間、客間
- C コート
- O その他（書斎、店舗、女中室など）

但し書き

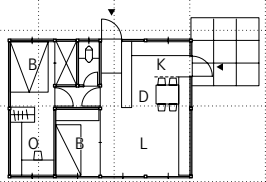
●本章掲載の図面は、RIA が 1969 年までに設計した約 460 件の住宅のうち、主要作品 118 件をピックアップし、掲載した。

●図面化の資料には雑誌、書籍等にて掲載された図面を使用した。資料が古く、一部判読の困難な箇所も存在したが、それらは可能な限り復元し、一部不明な点は元図面の表現をそのまま使用した。縮尺も厳密なものではない。

●掲載は、竣工年（計画は計画年）順としている。竣工年の不明なものに関しては、※を竣工年の末尾に付け、おおよそこの年次と思われる箇所に掲載した。

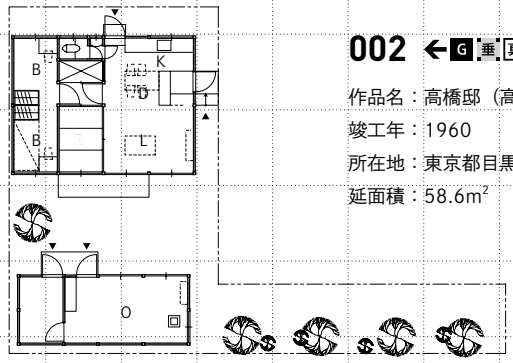
●発表時の名称と本書での名称が異なる場合、作品名の後ろに、括弧書きで発表時名称を記載した。

001 ←G 筆 真



作品名：ローコストハウス
竣工年：1952
所在地：－
延面積：39.6m²

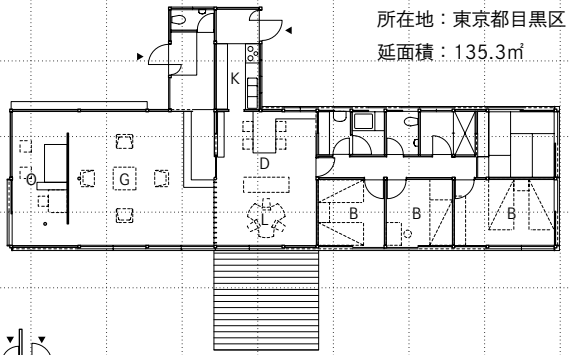
002 ←G 筆 真



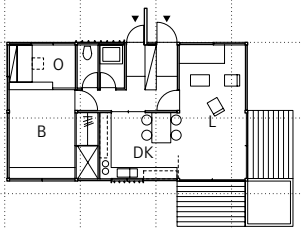
作品名：高橋邸（高橋さんのすまい）
竣工年：1960
所在地：東京都目黒区
延面積：58.6m²

003 ↓G 筆 真

作品名：大久保邸
（大久保博士の家）
竣工年：1952
所在地：東京都目黒区
延面積：135.3㎡



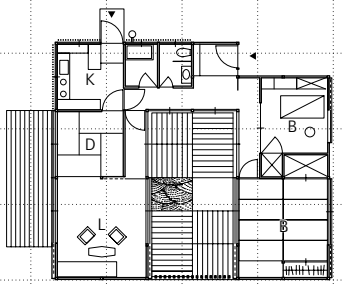
004 ←G 筆 真



作品名：小池邸（小池驍さんのすまい）
竣工年：1953
所在地：東京都世田谷区
延面積：43.2㎡

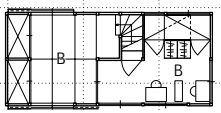
005 ↓G C 真

作品名：中村邸
竣工年：1953
所在地：神奈川県横浜市
延面積：－

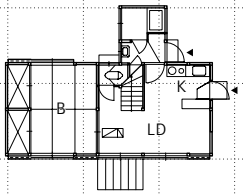


006 ↓G 筆 大

作品名：岡邸
竣工年：1953
所在地：東京都千代田区
延面積：100㎡

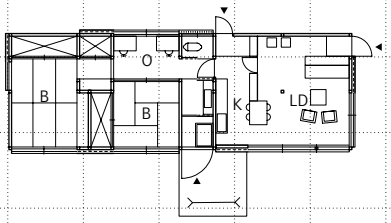


2F



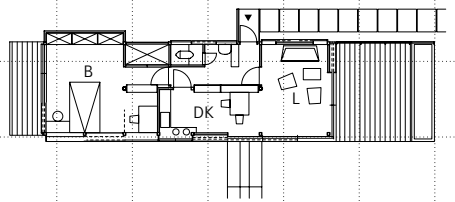
1F

007 ←G 筆 真



作品名：岩原邸
竣工年：1953
所在地：－
延面積：－

008 ←G 筆 真



作品名：千葉邸
（千葉さんのすまい）
竣工年：1953
所在地：東京都大田区
延面積：42.9㎡

SCALE = 1:300 0 3 6 9 12 15m